

中国は悠久の歴史を有し、国土は広大である。古代から今日に至るまでの歴史を振り返れば国土のあちこちで覇権争いや小競り合いを繰り返し、さらに厄介なことに異民族との攻防は時の政権をなんども苦しめ、有るときは転覆の憂き目にあった。

戦いは絶えなかったがそれぞれの時代、それぞれの地域で後世に語り継がれる歴史物語が生まれ、歴史に名を残す人物があまた現れた。紀元前の戦いの中で、我々日本人にも強烈な印象を与えた歴史物語は「呉越戦争」であろう。

それは周王朝の力が衰え始めた春秋時代(BC770年～BC403年)のことである。呉は紀元前514年に闔閭(生年不詳～BC496年)が今の蘇州に周圉25kmの城壁を築いて都とした。(この城壁は、盤門など一部を除いて今は無い)彼は後述する名臣・伍子胥を得て呉を一大強国に成長させた。越は会稽(今の紹興市)を都とした。

今回からは蘇州市について連載するが、あまりに記述すべきことが多いので整理するためまず有名な呉越戦争あたりから書き始めることとした。

呉は闔閭(第6代王)とその子夫差(第7代王)が特に有名であるが、どの国も急にそこにできたわけではない。呉としての初代の王は、「寿夢」である。姓は「姫」で名は「乗」と言った。彼の時代に呉は強大になり、彼が初めて王を名乗ったのだ。しかし物事には何でも前段というものがある。

呉の遠祖は周の「古公亶父」と言われている。彼の姓もやはり「姫」であり、呉は名門・周の流れを引いた国である。最後はBC473年に越によって滅ぼされていくわけであるが、その越もそれから140年命脈を保った後、BC334年に楚によって滅びた。

ここで古公亶父について少し付け加えておきたい。彼はあまり知られていないと思うが周王朝(BC1046年頃～BC221年)の初代王の武王の曾祖父である。(四書)五経の一つ、詩経の大雅編のなかで周という国の成り立ちを詠った詩に登場する。それによるとりっぱな人物であったようだ。

彼は西安の西、約135kmに位置する「岐山」という山の麓に周の国を建て、国家の基礎を造った。周が約400年後、洛陽に遷都(周の東遷)するまでこの場所が都であった。一説によると、日本の岐阜という地名は織田信長が岐山の「岐」と孔子の生地の曲阜の「阜」をとって命名したと言われている。こんな素晴らしい名前を付けてもらって、岐阜の人はさぞ鼻が高かろう。

話を元に戻そう。呉と越の抗争には、主役である呉王夫差と越王勾踐の他に脇役が何人かいるが、特に伍子胥という名臣と古代4大美女のひとり西施が花を添えている。そしてこれらの登場人物により、後述するように有名なことわざが生まれ人口に膾炙されている(「臥薪嘗胆」「会稽の恥(を雪ぐ)」「西施のひそみに倣う」「呉越同舟」等)。

呉越戦争の物語は皆さんよく御存じの通りだが、簡単に経緯を辿ってみると——蘇州城を築いた闔閭が越王・勾踐に殺害された時から始まる。息子の夫差は「薪の上で寝て」(臥薪)死の間際に言った父の遺言を忘れないようにした。そして力を蓄え、ついに越に攻め込み勾踐を会稽山(紹興市南部にある山)で打ち破った。そこで勾踐は夫差の臣下にさせられ、妻を妾として差し出すという屈辱を受けた(会稽の恥)。この時勾踐を殺害していれば歴史は違った展開を見せたであろう。伍子胥は後顧の憂いを除くため生かしてはダメだと強く進言したが夫差は受け入れなかったのである。

夫差は詰めが甘いと言わざるを得ない。勾踐は、呉の属国になった悔しさから毎日のように苦い熊の胆を嘗めて、呉に対する復讐を誓った(嘗胆)。

夫差に対する復讐に向けて勾踐は様々な策略を使ったが、その一つが美女を献上する作戦であった。美女たちの中の一人が傾国の美女「西施」であった。夫差はすっかり西施の虜になり、次第に政務がおろそかになっていく。そして彼女を喜ばせるために「木洸」の壘岩山に館娃宮という大御殿を建築するなど彼女の歡心を買おうとした。やはり夫差はトップ

の器ではなかったということだ。

ここで再度すこし長い横道に入る。「木洩」についてである。私は蘇州には4度行ったが、木洩には2003年に初めて行ったとき友人に案内してもらった。その時地名の由来を教えてもらった。木洩は蘇州市内から西南に10km離れたところにあるが、太湖に臨み、二つの運河が合流して、蘇州、太湖、揚子江を結ぶ交通至便の地であるため、物資の集積地となり、軍事の要衝ともなり歴史上も重要な地となった。



木洩にある「古松園」にて

その地に大御殿を建てるにあたって、かなりの木材を必要とされたため運河や河川を利用して運搬したが、量が多すぎて水路が詰まってしまったのである。その光景を「木塞於洩」(木が水路を塞ぐ意一洩は水路の意味)と表現し、それから木洩という地名となったそうだ。

蘇州の周辺には「水郷古鎮」と呼ばれる観光地がたくさんある。周荘、朱家角、同里、甪直、烏鎮、西塘、とあげればキリがないほどである。これは長江が運ぶ土砂が堆積して形成されたため、網の目状に水路が入り組んだ地形となったことによる。

整然と造られた街ではなく田舎ののんびりした水郷風景が今は観光地に変貌し多くの人を呼んでいる。この木洩も水郷古鎮として有名である。そしてほかの水郷古鎮とは一味違うと言えよう。先ずは前述の「館娃宮」があったことだ。

蘇州市の西には太湖を見下ろすようにいくつかの名山が連なっている。山というより丘の方が適切かもしれない。その一つに高さ180mの「靈岩山」がある。この山頂付近に建てたようだが、2500年前のことであるから勿論今は無い。ただ現在も残っている山頂花園は、館娃宮の遺跡と言われているそうだが、やはり山頂にある「靈岩山寺」にあったという説明もある。いずれにしてもこの山の頂あたりに建てたことは間違いない。ここで夫差と西施は永遠の愛を語らったのであろう。

靈岩山寺は空海が入唐時、長安への道すがら立ち寄った名刹である。さらにこの寺はもう一つ日本と

の関わりがあり忘れられない寺院である。それは八女茶(福岡県)の故郷でもあることだ。明代にこの寺で修行した栄林禅師が茶の実を持ち帰り、福岡に靈巖寺を建立するとともにこの地に茶を育てたのだ。それが八女茶というブランドに成長した。同寺院境内には、「八女茶発祥記念館」があるそうだ。いずれ靈岩山寺にも靈巖寺にも足を運びたい。

館娃宮の話が長くなったが、木洩には今も「西施橋」がある。中国独特の石橋であるが橋の中央には小さな四阿が乗っかっていて、とても風情がある。観光客、特に女性に人気があり橋をバックに写真を撮るので賑わっている。

いつも思うのであるが日本には橋の文化が感じられない。多くはコンクリートの橋脚の上にガードレールが取り付けられているような物ばかりで、本当に情けなくなる。新潟の萬代橋や長崎の眼鏡橋のような橋をもっと造ってほしい。どちらも数少ない日本国の重要文化財であるが、さすれば中国では重要文化財が数えきれないほどあることになる。

木洩が他の水郷古鎮と違うもう一つの点は古鎮内にいくつかの有名な庭園があることだ。蘇州市の中心部には拙政園をはじめ世界遺産の庭園がいくつかあるが、この木洩にも負けず劣らず立派な庭園がいくつかある。先ずは「嚴家花園」である。

この名園は、清の乾隆帝(1711年～1799年)時代の詩人・沈徳潜の別荘であった。その後光緒帝の時代に台湾の豪商・嚴国馨の手に渡り、嚴家の庭ということで「嚴家花園」と呼ばれるようになった。約

3千坪の敷地は春夏秋冬の4つの風景で区切られているそうだ。中国の著名な建築家からは「江南庭園の經典的作品」と称されているとのこと。經典とは、〈古典的とか、権威がある〉という意味である。もう一つ「古松園」も有名な庭園である。

この庭園には2003年の時案内してもらった。この庭園は清の末期に富豪の蔡少漁さいしょうぎょの邸宅として完成した。一番の見どころは裏庭に当たる庭園である。前述の靈岩山を借景とし、太湖石をふんだんに使った庭園は蘇州市中心部の庭園とは一味違った様相を呈している。古松園の名の由来は、羅漢松が植えられていたことから来ている。羅漢松とは日本では「榎の木」のことで、中国では風水で最も縁起のいい木との評価をされているとか。私が訪ねたときは名前の由来まで知らなかったので、この羅漢松があるのかどうか気づかなかった。

蘇州市の世界遺産の庭園は次号で書こうかと思っているが、一言だけ付記しておきたい。この蘇州市近郊の庭園はどの庭園も例外なく太湖石と先が反り返っている屋根の建物が見られる。私は日本人だからか、中国のこの手の庭園はどれも落ち着かない。太湖石はどう見てもセメントで造ったみたいだし、先の反り返った屋根を見ていると龍が跳ねている印象を受ける。その上観光客があふれればかりにいて、しかもおしゃべりで雰囲気壊されてすぐ外に出たくなる。日本の庭園はいろいろな自然石を使い、池も「心」の字を象ったり、松などが池の水面を覆うように植えられているさまを見るとき、静寂のなかの美しさを感じてしまう。

もう一度西施に戻る。彼女について書けばとても紙幅が足りないなのでここでは古代4大美女を紹介しつつ書いてみる。4人とはご存知のように、「楊貴妃やうきい」「王昭君わうしやうきん」「貂蟬ぢようせん」そして「西施」である。

彼女たちの生きた時代はすこしずつ異なる。西施は既述の通り春秋時代であり、「楊貴妃」は唐(618年～907年)代、「王昭君」は前漢(BC206年～AD25)時代、「貂蟬」は後漢(AD25年～AD220年)である。古代と言っても随分幅広い。実は4人の美女を一言で表す別称がそれぞれにつけられている。また別称の由来をまとめると次のようになる。

●楊貴妃：「羞花」 楊貴妃が後宮を散歩すると、彼

女の美貌と体から発する芳香に庭の花々が気圧されて(羞らうように)萎んだという故事による。

●王昭君：「落雁」 国のために異邦に嫁ぐことになった旅の途中、故郷の方向に飛び去る雁を見て望郷の思いを込めて琵琶を奏でたところ、悲しい調べと彼女の美しさに雁は羽ばたくことを忘れ地上に次々と落ちたという故事による。

●貂蟬：「閉月」 天下を憂い、物思いに耽る姿のあまりの美しさに月も恥らい雲の中に隠れたという故事による。

●西施：「沈魚」 (沈は中国語では「沉」)西施が川で洗濯をしていたとき、その姿に見とれた魚たちが泳ぐのを忘れたため川底に沈んだという故事による。

いつの時代にこれらの別称がつけられたのかは知らないが、4人とも甲乙つけがたい。

ちなみに中国語の辞書で引くと、「美人の容姿のすぐれてうるわしい」ことを「閉月羞花」というと出ている。呉越戦争の書き初めに、いくつかの諺を挙げた中に「西施のひそみに倣う」があった。四字熟語で「東施効顰とうしこうひん」とも「西施捧心せいしほうしん」とも書く。西施は胸が痛むという持病があった。発作が起きると胸元を押さえ眉間に皺を寄せるその姿はあまりに美しく魅力的であったため、近所の「東施」という女性が真似をして顔をしかめたところ、一層醜くなったという故事から来ている。

つまり「いたずらに人の物まねをして世の笑いものとなる」という意味だ。ちなみに「西施」という名であるが、本名は「施夷光しいうこう」という。紹興市近郊にある苧羅村おらで生まれた。ここには「施」という姓の家族が東西二か所に住んでいたが、彼女は西側に住んでいたので「西施」と呼ばれるようになったのである。

さて夫差が捕えられ殺された後、西施はどうなったのであろうか。呉が滅んだあとの西施については次のような言い伝えがある。

①捕えられ生きたまま皮袋に入れられ、長江に投げ捨てられた。

②西施献上の策を立てた「范蠡はんらい」と共に越を逃げ出し、一緒に余生を過ごした。

実際は①と思われるが、私は②と思いたい。なお、陳舜臣の「小説十八史略」は②の言い伝えを採用している。 (つづく)